論文

自然観光地の立地条件と資源の利用

小松原　　尚

はじめに
1．世界の地体構造と観光地
（1）変動帯の分布とプレート境界
（2）環太平洋造山帯における観光地と利用
（3）アルプス＝ヒマラヤ造山帯における観光地と利用
2．日本の自然環境と観光的利用
（1）日本の気候的、地形的特徴
（2）自然公園の観光的利用上の自然的制約
（3）国立公園の利用形態ー釧路湿原を事例としてー
3．自然観光資源利用上の問題点
まとめ

はじめに

国内外を問わず、観光への関心の強さは相変わらずである。観光およびその関連産業の振興による国民経済や地域経済への波及効果に対する期待は膨らんでいる。大学にあってもこうした時流を反映して、観光やそれに関連する専門教育を施す学部や学科を設置する大学も少なくない。履修コースの設定までも対象とすればその数は相当な数になろう。

こうした大学における、いわば「観光教育ブーム」に対して、これまでも

地域あるいは観光を対象とした研究成果を世に問うてきた地理学の分野にあっては、その研究成果活用の可能性を追究することは、現段階的かつ緊要な課題と考えられる。地理学の構成は地域地理学（地誌学）と系統地理学に分けられる。さらに系統地理学は人文地理学と自然地理学に分かれる。地理学における教育研究は地域における環境を対象に自然現象と人文現象を具体的、統一的に把握する、あるいはその手法を磨くことに主眼がある。

本稿においては、斯学における研究成果の中から観光を対象としたものを取上げる。まず、地域地理学における世界地誌の領域から観光地の立地条件を自然景観の中でも山岳地域のそれを中心に紹介する（１節）。次にわが国の自然環境の特徴を気候と地形の側面から概括した後、自然公園、中でも国立公園の利用状況（２節）、そして課題と展望に関して（３節）、主に人文地理学、なかんずく経済地理学の研究成果のものをとりあげて考察する。

１．世界の地体構造と観光地

（１）変動帯の分布とプレート境界

自然地理学における関心事の１つに、地殻内部の循環構造によって生じる地体構造の研究がある。世界の地体構造を示した地図（例えば、二宮書店編集部, 2009, p.169 の図④）を眺めると、それは３分類されていることがわかる。その中で地殻変動の活発なのは新期造山帯であり、日本列島を含む環太平洋造山帯と東南アジアからヨーロッパアルプスに至るアルプス＝ヒマラヤ造山帯に２分されている。また、地殻を構成するいくつかのプレートの境界（継目）も大地の割目（地溝帯）を生じている。このような変動帯は地表に起伏に富んだ様々な地形を生じ、エクメネ（居住空間）で生活するわれわれにとってはそこでしか見ることのできない貴重な自然景観を形成し、観光資源ともなりうる。

次に、プレート境界について述べておこう。まず、北アメリカプレートとユーラシアプレートとの境界上にあるアイスランドである。国土は「大西洋中央海嶺が海上に姿をあらわした部分といわれる。国土の 80％は火山地域で……最高峰は島の南岸近くにあるオレファ山（2,119 m）で……アイ

スランドの火山の噴火は大地が数kmにわたって割れ、そこから軟らかい溶岩が布状に噴出する形式で、アイスランド型噴火とよばれている」（伊澤，1992，p.226）。一方、アラビアプレートとアフリカプレートの境界が伸びる東アフリカ大地溝帯とその周辺では地溝湖や火山などの大地形が分布する（伊澤，1992，p.127）。

（2）環太平洋造山帯における観光地と利用

伊澤（1992）の研究成果に依拠しつつ、それらを概観しておこう。まず、環太平洋造山帯では、日本列島の南に他に台湾がある。島の脊梁山脈にあたる台湾山脈の「東麓の太平洋岸に近い太魯閣渓谷は、黒大理石の渓谷で断崖が連続し、台湾山脈中第一の景勝地となっている」（伊澤，1992，p.63）。さらに、二宮書店編集部（2009，p.41）をみると、島内には多くの温泉があることもわかる。

南半球に転ずればニュージーランドもこの環に含まれる。「北島中北部の火山地帯にある火口湖のロトルア湖周辺のリゾート地帯で、ニュージーランド最大の観光地になっている。……付近には温泉・間欠泉、地熱などの噴出地があり、自然的観光資源も豊富である」（伊澤，1992，p.302）。そしてこの環は南極横断山脈から南極半島、サンドイッチ諸島を経て、南米のアンデス山脈へと続く。そしてパナマ地峡をから北米大陸に至る。そして、イエローストーン国立公園は「ワイオミング州北西部を中心にロッキー山脈にひろがる面積 1.4 万平方キロメートルの標高 2,200 ～ 2,500 mの広大な溶岩台地で、……温泉や間欠泉も噴出している。特にオールドフェスフル（誠実な老人）とよばれる間欠泉やイエローストーン湖、イエローストーン川の滝や大峡谷、温泉群などが有名である。ロッキー山脈のすぐれた自然景観を永久に子孫に伝える目的で、1872 年にこの地域全体が国有地になり世界最初の国立公園に指定された」（伊澤，1992，p.263）。

さらに、国境を越えたカナダのバンフ国立公園は、「カナダ太平洋鉄道がカナディアン・ロッキー山脈を越える景勝地に、カナダ最初の国立公園として 1885 年に開かれた。バンフ駅の南にはサルファー山（2,280 m）が聳え、ロープウェーで山頂からはカナディアン・ロッキー山脈の褶曲構造……を眺望

することができる。レークルイーズ駅近くには、『カナディアン・ロッキーの宝石』とよばれるルイーズ湖がある。近くには、……温泉も各所で湧出し、付近の山腹は冬には格好のスキー場になって」おり多くの観光客が訪れている（伊澤，1992，p.275）。

また、アメリカ合衆国アラスカ州の「マッキンリー山（インディアン語でディナリ山［6,194 m］）は、北アメリカ大陸の最高峰で山麓一帯が合衆国最大の面積をもつディナリ国立公園に指定され」ている（伊澤，1992，p.259）。

（3）アルプス＝ヒマラヤ造山帯における観光地と利用

まず、東南アジアインドネシアのマルク（モルッカ）諸島は「環太平洋造山帯とアルプス＝ヒマラヤ造山帯の会合点にあたる地殻変動の激しい地域で、K字型のハルマヘラ島をはじめとして多数の島々からなる。また、ジャワ島にあるパングランゴ山（3,019 m）は島最大の火山で、登山観光地である」（伊澤，1992，p.82）。

また、南アジア、ヒマラヤ山脈の山懐のネパールでは「カトマンズやポカラを基地にしてバスや乗用車を利用し、シェルパ族のガイドやポーターに依頼して、１～２週間のヒマラヤ山麓の山歩きを楽しむトレッキング・ツアーが、ネパール観光の特色になっている」（伊澤，1992，p.98）。

一方、ヨーロッパでは、アルプス山脈の「フランスとイタリアの国境に聳えるモンブラン山（4,807 m）はヨーロッパ最高峰で、1786 年に医師M．G．パッカーの初登頂がありアルピニズム（近代登山）の発祥地になった」（伊澤，1992，p.155）。

また、スイスでは、「ベルン州南部のアルプス山脈でユングフラウ（4,158 m）、アイガー（3,970 m）、アレッチホルン（4,195 m）などの高山があり、アレッチホルンの周辺にはアルプス最大の長さ 24㎞に達する大アレッチ氷河が１日に 10 ～ 15㎝の割合で下流へ移動している。大アレッチ氷河はベルンアルプス最高の観光資源である」（伊澤, 1992, p.187）。そして、東アルプスは「オーストリアのチロール地方に近いアルプス山脈で、……（サンモリッツは、）イタリア国境近くドナウ川支流のイン川源流部の湖畔に位置し、温泉が湧出し、夏の避暑、冬のスキー・スケートのリゾート地である。……サンモリッ

ツとツェルマットを結ぶ……『氷河特急』が240㎞を７時間半で走っている。車窓からのアルプスの風景は世界一美しい自然景観であるといわれている」（伊澤，1992，p.188-189）。

そして、オーストリアのチロールの谷は「南側には3,000ｍを越えるアルプスの山々が続き、夏は避暑や登山、冬はスキー・スケートのリゾート地となる。ドイツからの観光客が多」い（伊澤，1992，p.191）。

２．日本の自然環境と観光的利用

（１）日本の気候的、地形的特徴

杉谷・平井・松本（1993，p.6）によれば、「火山地域は自然がよく残り、珍しい地形もあって、多くが国立公園に指定されている。……温泉といえば、……近年これも『観光資源』とよばれ、火山麓の緩斜面を利用してスキー場を併設し、若者を呼び込んで地域振興の目玉にする例が方々にある」と指摘している。さらに、「日本の南北には、大きな気候の差がある。春を告げる桜の花を例にみてみよう。南西諸島のヒカンザクラは、早くも１月下旬に咲き始める。このころ北海道では一面の雪景色、オホーツク海沿岸には流氷がやってくる。いっぽう、北海道の東北部でエゾヤマザクラが咲き始めるのは、５月中旬である。この頃南西諸島では、もう梅雨が始まっている」とわが国の気候の多様性に関しても論及している（杉谷･平井･松本, 1993, p.120）。国土の縁辺部にある地域にとっては、こうした自然環境を活用しながら観光客誘致に工夫を凝らしている。

（２）自然公園の観光的利用上の自然的制約

大都市圏から最も離れた地域の１つである北海道を例にすると、全国と全道の旅行頻度の月別構成比の変化によると、「全国、北海道ともに８月に集中している。また、全国では梅雨期の６月から７月にかけて構成比が落ち込んでいるのに対し、北海道は６月から９月まで10％以上の構成比を示している。これとは逆に１月から４月までと11月から12月までは北海道が６％になっている」ように、気候条件が観光サービス需要の季節的偏りを大きくしていることがわかる（小松原，2007，p.28）。ただし、北海道という範囲

で括られる地域にあっても、季節的偏りの大きい地域と小さい地域とに分かれる。

前者については、① 自然公園域内にあるニセコ、富良野のような北海道内の主要なスキー場であり、それぞれ、ニセコ積丹小樽海岸国定公園、富良野芦別道立自然公園、② 札幌、旭川、函館という道内の主要都市、③ 定山渓、登別、洞爺湖、温根湯、十勝川、阿寒という北海道を代表する温泉地であり、それらは、支笏洞爺国立公園（定山渓、洞爺湖）、阿寒国立公園といった国立公園域やその近隣地域にある。（小松原，2007，p.30）。

一方、後者に関しては、海水浴場を含む海岸線や湖沼、内陸の山岳地域が観光資源となっている観光地が多い。この意味から夏季への集中傾向が強くなっていると考えられ、海岸線を取り囲む形で分布しているものが多い（小松原，2007，p.29-30）。それらの中には北海道北部や東部の自然公園域に含まれるものが多く、主な公園名を挙げておくと海岸線のものでは、暑寒別・天売焼尻国定公園、利尻礼文サロベツ国立公園、北オホーツク道立自然公園、網走国定公園、知床国立公園、野付風連道立自然公園、厚岸道立自然公園、釧路湿原国立公園が該当する。さらに、内陸部では、朱鞠内道立自然公園、大雪山国立公園、阿寒国立公園があたる。

（３）国立公園の利用形態－釧路湿原を事例として－

これまで述べたように、国土の縁辺地域には自然環境に優れた地域が少なからず存在し、それらの多くは国立公園、国定公園、都道府県立自然公園に指定され、そこに暮らす人々は、それらを観光資源として利用していることもわかった。しかし、自然環境の性質上、季節的制約、中でも夏季への観光客の集中が顕著な観光地が多い。そこで以下にその利用形態の１事例を示しておこう。小松原（2007，p.38）によれば、1974 年以降、わが国の国立公園、国定公園の指定をみた地域は北海道、東北、九州・沖縄という、国土の縁辺地域にある。これまで、幾度かの開発ブームの中で取残された地域であるが、その結果として貴重な自然観光資源を有する地域でもある。1987 年に、全国で 28 番目の国立公園としての指定をみた釧路湿原もそうした自然公園の１つとして位置づけられる。

1991-1995 年度の平均値をみると、釧路湿原への観光客の入込み数は 654,445 人であり、1986-1990 年度の平均値（292,673 人）と比較すると 2 倍以上の増加を示している。この間の全道合計の変化は 1986-1990 年度の 112,107,541 人から 1991-1995 年度の 129,192,931 人であり、およそ 1.15 倍の変化に止まっているから、釧路湿原地域の変化の大きさが際立っていることがわかる。中でも道外客の構成比が 29.0％から 39.8％へと 10 ポイント以上伸びている。この傾向は、釧路湿原国立公園の指定やラムサール条約締約国釧路会議の開催等による国内外への地名度の向上と湿原の観光資源としての評価の高まりによるところが大きいと考えられる（小松原，2007，p.39）。

観光客入込みの月別構成比に着目して季節的な偏りを検討した結果では釧路湿原地域は８月を挟んで７、９月に集中する夏季型の観光地である。同様の傾向は釧路湿原地域を含む北海道東部の傾向と一致する。国土の縁辺地域の典型事例である北海道にあっては、これまでも大自然を観光のセールスポイントの一つとしてきた。大都市圏から隔絶された道北からオホーツク、そして釧路・根室の地域は特にその傾向が強いと考えられる。これらの圏域には釧路湿原のほか阿寒、大雪山、知床の各国立公園が含まれ、わが国を代表する自然観光地域の１つであると考えられる。そして、釧路湿原もそうした観光ルートの一環としてとらえられる（小松原，2007，p.39）。

環境庁自然保護局東北海道地区国立公園・野生生物事務所では 1994 年度から 96 年度まで３年間にわたって「釧路湿原国立公園の指定に伴う地域経済への影響調査」を実施した。筆者も参加した「釧路湿原国立公園利用者アンケート」の調査結果を利用しながら、自然公園の利用者の流動形態を検討すると以下の点がわかる（小松原，2007，p.41-53）。

まず、①　釧路湿原を訪れる観光客の主流は釧路市湿原展望台、細岡展望台に立寄る利用形態である。彼らは、地域内の他の観光拠点への関心は薄く、釧路市から他の観光地への移動に際しての通過地点として位置づけられていると考えられる。団体旅行もこのタイプがほとんどである。

これに対して②　件数では全体の３割程度であるが、立寄り地点選択が豊富な利用者も存在する。選択頻度に幅があるものの 209 通りの流動形態を検

出できる。地域内における体験・学習観光拠点の１つである温根内ビジターセンターを利用したケースの大半はこの型に含まれ、このタイプの中にエコ・ツーリズム的なものを読み取れるのではなかろうか。

そして③　上記２点に共通にみられる傾向として関東地域からの利用者が多いということ。そして、移動手段として自動車（自家用車、自動二輪車、レンタカー）の利用が多いことがあげられる。

３．自然観光資源利用上の問題点

自然環境の利用に関しては、その持続的利用への配慮が求められている。脇田・石原（1996）は、景観の保全と利用に関する詳細かつ具体的な論述を展開している。この点に関しては小松原（1996）にて詳述したところである。本稿ではその中から特に、標記課題にかかわる部分を、改めて内容を紹介してみたい。

脇田（1996）は、まずアジアにおけるゴルフ・ツーリズムの拡大に伴う森林の破壊とそれによって引き起こされる自然災害を例に自然の「フィードバック（跳返り）論」を展開している。例えば、タイでは「5,600ha の森林を切払い、その中に３ゴルフ場、700 戸の高級住宅・一流ホテル・デパート・公園・総合スポーツ施設・瞑想道場、空港を揃えた総合レジャーセンター方式の巨大開発。そのため、木材輸出も含めて森林乱伐が進み、1961 年に全国土の 53％を占めていた森林面積は最近 28％に激減した。……かくして森林伐採後は荒地の景観に変わり、山林の場合は河川が流出する泥土で汚染し、川魚もいなくなった。また、大雨が降ると山津波が発生し、家屋もろとも住民の犠牲が続出する災害が各地に発生。……あまりにも目先の利益にとらわれた開発であり、地域住民の犠牲、国土荒廃をもたらして何のため、誰のための開発であろうか。このような誤った、行き過ぎた開発は、自然群系の怒りにも似た社会経済系へのフィードバックを招くことになる」（脇田，1996，p.2-3）。そして、自然景観と農村の生活を反映した人文景観，それに食糧供給と緑地保全の役割を果たす農民の役割のバランスがとれた状態，スイスの事例を『景観的調和論』としてまとめている（脇田，1996，p.5-9）。

さらに神奈川県箱根町における温泉開発の試みから「生態的均衡論」を提唱し（脇田，1996，p.9-12）、最後に北海道えりも町で森林乱伐による生活環境の悪化や漁業不振から植林を通して立ち直り人口定着、観光客増加に向かった事例を基づいて「自然群系・社会経済群系の共生論」を究極の地域振興の道として提示している（脇田，1996，p.12-16）。

次に溝尾（1996）は、観光地利用の季節変動への地域や経営の対応について著者の豊富な地域研究事例をから検討している。例えば花を利用したものとしては北海道東藻琴村や滝上町のシバザクラ、富良野市のラベンダー、茨城県潮来町のあやめ、菖蒲を紹介している（溝尾，1996，p.70-71）。観光にあっては季節変動は避けられないこととして，「第１に、積雪地域ではオンシーズンだけ観光者相手の経営を行い、他シーズンは農林業を営むと割り切る考え。……第２は、冬季１季だけがオフの地域では、オフ期には営業を休むか、部分休業にして、３季に力を注ぎ、その期間の来訪者の増加を目指す。……第３は、１季型の観光地である低利用観光地においては、過度な投資を慎み、１軒、１軒の収容力を２部屋程度に小さくして、地域の多くの人が民宿にかかわり合いをもち、地域全体で収容力を大きくしていく方法にする。……第４は、オフ期にイベントや新規の事業を展開したら、それを長期化させること」というようにオフシーズンの対応の仕方を、副業、休養、の期間として考え、過度な投資を避け、長期的展望にたった集客の試みが必要と結論付けている（溝尾，1996，p.71-72）。

三澤（1996）は、最初に環境アセスメントの制度化過程の特徴を著者は港湾法、公有水面埋立法、工場立地法などの個別法や各省庁の行政指導で開始されたと指摘している（三沢，1996，p.129）。このため実際の運用状況を千葉県のゴルフ場への適用事例でみても住民の関心は低調である。また、わが国のアセスメントは事業計画の具体化段階で実施されるため事業そのものの大幅な修正や中止はできないという限界にも触れられている。こうした「事業アセスメント」に止まらず計画段階から地域環境と地域開発に関する議論を踏まえた「計画アセスメント」の必要を著者は説いている（三沢，1996，p.135）。

早船（1996）は丘陵地帯における農業と観光資源としての景観の保全とについて北海道の中央部の農村地帯である富良野市と美瑛町を事例として論じている。起伏に富んだ農地に栽培される作物の織りなすモザイク模様は観光資源である（早船，1996，p.137-140）。近年実施されている農地の均平化工事はこの景観を破壊するばかりでなく土壌保全や防災上からも好ましくないと著者は指摘し（早船，1996，p.140-144）、「健全な土壌のもとで、安全な農法により作物が栽培されているところを、農家はリゾート客（実は消費者）にみてもらい、リゾート客は作物の生育過程をつぶさに見（ニンジンやタマネギの花を知らない人が多い）、安全な農産物であることを理解できれば、訪れる側と受け入れる側との心の交流」（早船，1996，p.146）によって、農家と観光客との相互理解に基づいた、安全な食糧生産と国土保全を目指した「環境保全型農業」への転換を提唱している。

磯辺（1996）は、「水島工業地帯造成のための埋め立てで、白砂青松の塩生海水浴場などが消滅し、埋立地に建設された大規模な重化学工場は景観の大きなマイナス要素となっている。また、1979 年から行われた瀬戸大橋の建設工事は、国立公園第 1 種特別地域をも破壊していった。……また、瀬戸内海国立公園普通地域の日生町鴻島では、町営の上水道通水後、急斜面や岬などで別荘開発による景観破壊が行われ、牛窓町では、集落の前面へのホテル建設や岬へのペンション建設などによって景観が破壊されている。さらに、倉敷市の瀬戸内海国立公園第 2 種特別地域の鷲羽山周辺では、瀬戸大橋開通前後を中心に、ホテルや展望タワー、レジャー施設が山上などに建設され、景観を破壊している」（磯辺，1996，p.148-149）と、瀬戸内海沿岸域の景観破壊過程を跡付けながら、岡山県内の市町村を事例として沿岸域だけでなく中山間地域も含めた地域振興と景観管理のあり方について論じている。県の景観条例は行き過ぎたリゾート開発に一定の歯止めを示したが規制地域の指定に問題を残したと著者は指摘している（磯辺，1996，p.151）。また、望ましい景観管理の事例として、日生町大多府島の漁村型リゾート（磯辺，1996，p.152-153）や棚田を活用した天然米産地として成功した吉備高原の中山間地域の事例（磯辺，1996，p.153-154）が挙がっている。

まとめ

大地の営みは人類に様々な感動を与えてくれる。だからこそ、地球上の自然環境はそこでしか見ることのできない貴重な景観を形成し、観光資源となっている。そして、そこを訪れる人々は改めて大自然の営為に感嘆の声を発するのである。地形の内的営力、すなわち、地中のマグマの活動に起因する作用によって形成されたものに限ってみてもその特徴は多様である。その点を２系統の新期造山帯に沿って、火山、温泉地、山岳地帯における観光的利用を概観した。そして、現在もなお地形変動を持続しているそのような変動帯、そのつながりの中の日本に暮らすわれわれにとって、見慣れた風景でも、地球規模からみると特異な存在が少なくないこともわかる。自然公園、中でも国立公園に指定されている地域を中心に、国土の縁辺地域、その典型である北海道における火山と温泉地、海岸地形、湿地などの観光的利用に関する考察を紹介した。同時にその利用に際しての自然的制約に関しても述べた。

自然観光資源には、その利用に対して環境への配慮が強く求められる。資源の稀少性が広く認識されればされるほど、それに触れたい、そこを訪れたいという衝動を高め、観光行動を引起す大きな契機となる。しかし、その一方で「観光公害」とよばれるような不利益を地域にもたらすのも事実である。デリケートな自然であるがゆえに、その利用に限度を設定し、自然環境と社会環境の一体的理解のもと、人間活動による自然環境の毀損を防止する。そのような観光資源の持続的利用に向けての方途に関しても先行研究を紹介した。

もとより本稿における考察は、自然観光地の立地全般にわたる考察ではない。例えば、わが国の気候の特徴、冷帯から亜熱帯までという気候帯の多様性については、ほとんど触れられなかった。他日を期したい。また、取り上げた研究成果は 1990 年代のものに偏ってしまった。これは、この時代にリゾートをはじめ自然観光資源の利用に関して、様々な制度変更が実施されたこと、そして、その結果生じた現段階的諸問題の原点を確認する必要があると考えたからである。その意味では、現状における分析がさらに必要なこと

は言うまでもない。この点も今後の課題としたい。

文献

伊澤利久（1992）：『海外観光地誌』中央書院.
磯部作（1997）：沿岸域の振興と景観管理（所収　脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院：148-155）.
小松原尚（1996）：書評 脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院，1996 年，165 頁，『経済地理学年報』42-4：87-90.
小松原尚（2007）：『地域からみる観光学』大学教育出版.
杉谷隆・平井幸弘・松本淳（1993）：『風景の中の自然地理』古今書院.
二宮書店編集部（2009）：詳解現代地図，二宮書店.
三澤正（1996）：環境影響評価（所収　脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院：129-136）.
溝尾良隆（1996）：観光施設の整備と観光の通年化（所収　脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院：66-79）.
早船元峰（1996）：環境資源“丘”における農業と環境保全（所収　脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院：137-147）.
脇田武光（1996）：地方の観光開発と地域振興の視点（所収　脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院：1-18）.
脇田武光・石原照敏（1996）：『観光開発と地域振興―グリーンツーリズム 解説と事例―』古今書院.